

第6号発刊にあたっての挨拶

毎年恒例の研究室新聞（挑戦）の発刊時期となりました。1年に1回の発刊ではありますが、卒業生・修了生諸君がこの新聞を通して研究室全体の状況を理解し、今まで以上に研究室に対する親近感を持つことを期待しているところです。本新聞の発刊にあたっては、研究室新聞委員会（委員長：大学院前期課程2年 杉本智子さん）のメンバーに大変な苦勞をかけており、改めて感謝する次第です。

昭和58年に教授に就任してから、早いもので今年で14年目に入っています。その間、社会人となった修了生・卒業生は150名を越えており、全員が元気で活躍している話や頼りを聞くたびに、この上ない喜びを感じています。

第5号発刊以降の研究室の状況について報告しますと、平成7年12月1日付で鈴木雅史先生が助教授に昇進、平成8年4月1日付で水戸部一孝君（平成3年3月秋田大学電気工学科卒業 吉村

研究室主任 吉村 昇

研出身）が、北海道大学大学院工学研究科博士後期課程生体工学専攻を修了（博士〈工学〉）し、助手として赴任して来ました。これでやっと本研究室も佐藤技官を含めて4人という通常のスタッフになることができました。また、本研究室出身の西田眞先生が、平成8年1月1日付で情報工学科の教授に昇進しました。誠に嬉しい限りです。

しかしながら、その後研究室にとっては大変悲しい出来事が発生してしまいました。6月5日に研究室4年生3人の乗った車が自損事故を起こし、長屋信明君が即死、他の2人の4年生が重傷という事態になってしまいました。私にとりましては大変ショックでした。研究室を預かって14年間で初めての悲しい出来事であったのです。

事故後、現役学生諸君は研究室内で十分に話し合いをしたそうです。彼らの心境を書いたノートを私も読みました。今後二度とこの様な悲しい出来事を起こさないことを誓っています。長屋君の

御冥福を心よりお祈りする次第です。

学部長に就任してから、忙しさを理由に研究室にあまり足を運ばなかったことが、この様な形で巡って来たのかと、深く反省しています。教授として学生と日頃より十分に会話する時間を作るべきであったと思い、それ以降はできる限り時間を作っては研究室に足を運んでおります。

今年の就職戦線は昨年度以上なのか、それとも今年の院生、4年生のレベルダウンなのか、思うように内定者が出ていません。かなりの学生が落

ちています。大変深刻な状況です。なかなか落ちていて研究が出来ない状況でもあります。“どうしてもその会社に入ってやるぞ”という印象に欠けているように見受けられます。もっと若者らしい元気さとガッツがあって当然と思いますが！

挑戦する心構えを持って、先輩に続いてほしいものです。

今後とも吉村研究室を宜しく。また、皆様の健闘を祈っております。

盛夏

Big News! 題して「帯広からの使者 (Nice Guy)」

OB・OGの方々をご存じの方もいらっしゃると思いますが、5年前に吉村研究室を卒業して北大大学院に行っていたあの水戸部一孝氏が、我が研究室に助手として加わって参りました！細かいことは抜きにして、まずは本人の自己紹介をご覧ください。

諸先輩および後輩のみなさん、平成3年に卒業しました水戸部です。新しく助手として吉村研のお手伝いをさせていただくこととなりました。不勉強のため、いたらぬ点が多々あるかとは思いますが、叱咤激励の程よろしくお願いいたします。

簡単に自己紹介をさせていただきます。出身は北海道帯広市で、昭和62年に秋田大学に入学しました。在学中は当時の電気工学科に在籍し、弓道部に4年間所属しておりました。卒業後、北海道大学大学院工学研究科生体工学専攻で5年間、居候してまいりました。北大では目の視聴覚および平衡感覚を運動計測の手法を用いて調べ、学習障害(Learning Disability)の診断システムを試作しておりました。

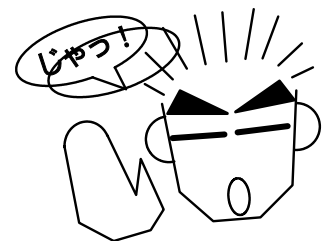
5年ぶりに秋田に戻ったわけですが、第一に、街の変化に驚きました。郊外は、大型駐車場を兼ね備えたショッピングデパートが建ち並び、活気にあふれております。秋田大学もキャンパス内には「今時の」という雰囲気を漂わせた学生さんで溢れております。5年の年月がもたらした確実な変化を感じておりましたが...

いざ吉村研で生活してみると、5年前と全く変わらぬ研究室であるということに気付いたのでした。それは、部屋や装置(Hardware)が変わっていないということではなく、吉村研の仲間と接して感じた印象です(もちろん研究テーマは、一層面白く展開しています)。不思議なことに、5年前に私がいたときにお会いした先輩、同輩とそっくりな独自性と闘志にあふれる沢山のキャラクター(Software)が活躍しております。私は最近、ハードよりもソフトに重要性を感じているのですが、今後は自分を含めたソフトのVersion up、そしてGrade upを行っていくことを第一の目標とし、仲間と共に楽しんでいきたいと思っております。諸先輩および後輩諸君の訪問をお待ちしております。

この水戸部先生の自己紹介を読み、これから先も吉村研究室の人々が良いところを受け継ぎながらより発展していくことを期待できるような気がします。

しかし、実は学生が以前と変わった点の一つあるんです。年々、学生がお酒に弱くなっています。(皆さんセーブしているだけだと思います)酒好きの私としては、非常に残念なことです。学生の皆さん、飲み会の時は弾けるくらい楽しく飲みましょう。

さて、水戸部先生のお酒の強さはいかほどなのでしょう？



Painted by BEN
Arranged by AKIKO

吉村先生秋田市文化章受章

去る昨年 10 月 13 日に発表された平成 7 年度秋田市文化章に、吉村先生が受章されました。（受章式は 11 月 2 日）受章者は産業分野からの吉村先生はじめ学術、社会文化、技芸から計 4 名。

研究室の学生一同も、新聞等でこの名誉な受章を知ったときは非常に驚嘆しました。

先生は、昨年学部長に就任して以来、以前にも増して忙しい日々を送っており、その努力が学部・大学全体の改革、引いては秋田県全体の発展に大きく貢献したものと思われます。新聞にも「市の情報発信基地としての基盤確立に貢献した」とありました。

先生は常日頃から学生に気を配り、忙しいながらも短時間ではありますが、暇を見つけては研究室に足を運んでおられる様子です。（あまりの速さにびっくりすることもあります……。その都度、忙しさを実感します。）また、研究室主催の行事（ボウリング、焼き肉パーティ等）は必ず開催してくれ、大変有り難いことです。

なお、右に載せた写真は、1996 年 7 月号の電気学会論文誌から抜粋したものです。吉村先生の最新の写真です。（個人的にかなりグットな写真かと思いますが……）

さて、先輩たちがいらっしやった時代と比べての印象は？

鈴木先生助教授昇進

平成 7 年 12 月 1 日付で、鈴木先生が助教授に昇進されました。ほとんどの学生がそのビックニュースを知らせていなかったため、先生方の所在確認に使われる札が突然「助教授 鈴木 雅史」になっていたことに大変驚き、大騒ぎになりました。

それに反して、当の本人は当日の相変わらずのおとぼけぶり。何一つ変わった様子はありませんでした。しかし、以前にも増してお忙しそうです。それでも、学生を心配してか（そんなことは一言もいりませんが……）、もしくは単に居心地がいいのか（4 階はととも暑いという噂ですから）ご自分の部屋よりも、我々学生のいる 3 階研究室の方が長い、という毎日を送っていらっしやいます。

最近の日常会話から

吉村研究室を卒業していった諸先輩・後輩の方たちにしてみれば、この新聞を通して一番知りたいことといったら、現在この吉村研究室がどんな様子なのか、ということに尽きるかと思えます。

まずは、昨年吉村先生が学部長に就任してから、研究室にいる時間が激減し、学生と接する機会がほとんどなくなってしまいました。「忠さん」の愛称で知られる佐藤技官（これは変わっていませんね。以下、失礼ながら、忠さんとさせていただきます。）もこのことが依然と最も変わったことだ、とおっしゃっております。さらに忠さん曰く、「留学生が多くなったなあ……」とのこと。留学生、日本人ともにコミュニケーションを諮ろうとする意志が少なくなってしまったので、必ずしも良いことばかりではないという含みがあるようです。中には、日本人よりも日本人らしい留学生もいますが……。

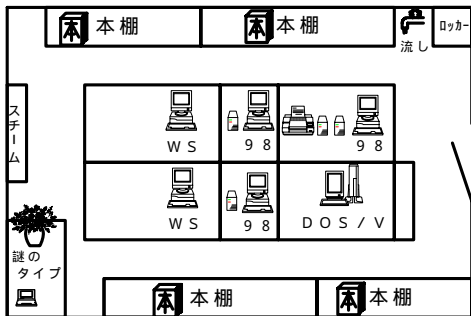
また、秘書の船木さんと会話した折り、「今年の研究室は雰囲気明るくなったね。」と言われました。これはやはり、研究室に女子が増えたことが一番の要因でしょう。（4 年生だけで 3 人もいるんです。）あとは、「今年の 4 年生はよく挨拶をしてくれる。」と。なかなか嬉しそうでした。やはり、挨拶は大事ですね。

忠さんも船木さんも、さらに他の人も口をそろえて言うのが「お酒を飲まなくなった！」「酒の飲み方が下手だ。」ということ。最近、飲み会の度に飲み物より食べ物の方が早くなる、という緊急事態に陥っております。みんな、遠慮しないで飲みましょう！

研究室の各部屋の状況は？

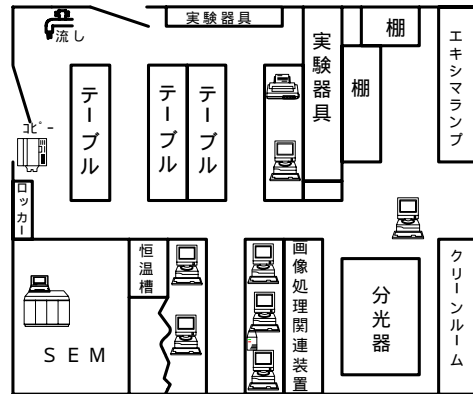
挑戦第4号でも各部屋の状況の紹介がありましたが、本年度かなり大がかりな大掃除を行い、各部屋が随分、様変わりしました。大きな変化としては、4階の412号室が我が研究室の“Sim Room”として仲間入りしました。これで「今までの実験装置やコンピュータを押し込んでいた。」という状況から抜け出し、研究する環境がかなり快適になりました。私たち学生としては非常に嬉しい限りです。

それでは、現在の部屋の状況を簡単に説明します。



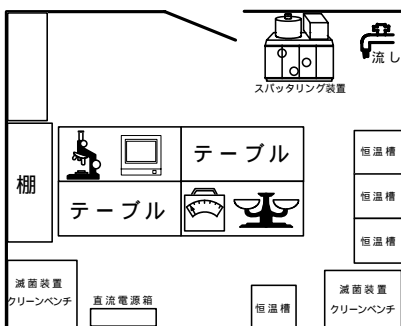
412号室

これが新しく“Sim Room”として設けられた部屋です。ワークステーション, DOS/V (Pentium133MHz), PC-9821APなど6台置かれています。まだ足を踏み入れたのは少数ですが、今後活躍が期待されます。また、この部屋にはあの怪しい観葉植物が第一実験室から引っ越し、さらにハブが何とも奇妙な貝割れのようなものに変身し、かなり怪しげな部屋と化しています。



319号室 (第一実験室)

412号室に半分余りパソコンを持っていかれ、広がった部分に恒温槽, 赤外線顕微鏡などが置かれています。やっと我が研究室でもインターネットの利用が可能となりました。しかし、不都合が発生することもしばしばです。

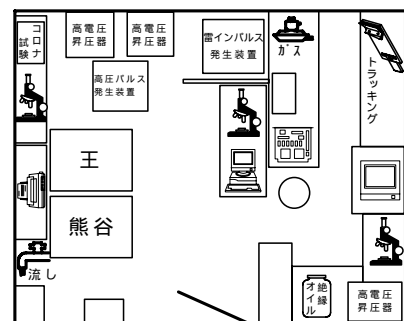


316号室 (左)

バリエーションの部屋です。エアコンが設置され、真夏でも快適な部屋です。春に大掃除を行った際、怪しい液体入りの瓶、ネムパルのない薬品などの到底“お宝”とは言えないものが見つけられました。

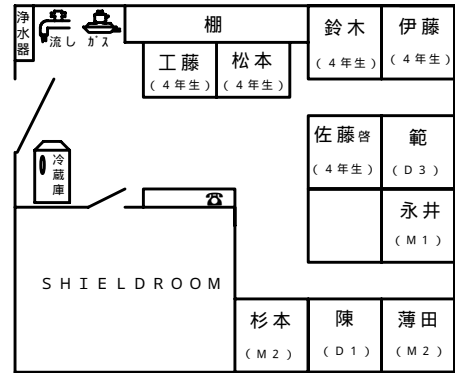
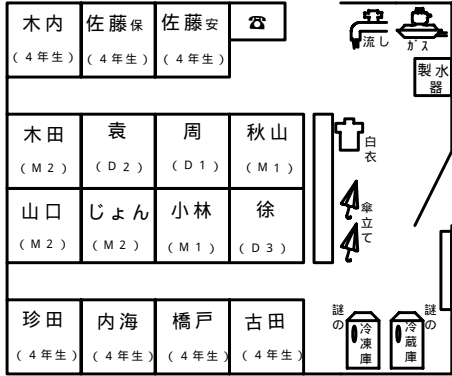
306号室 (右)

ここは依然と変わらずトッキング・トリ関係の部屋です。高電圧の機器が集まっているので、相変わらず少し(?)怖い… 普段は2名しかいないので、寂しい部屋となっています。「寂しいから誰か遊びに来て〜！」とは某・熊谷氏の言。



320 号室 (右)

主にシミュレーション関係の人間が集まっています。例年通り鈴木先生がいる確率が最も高く、個人持ちのパソコン (速いマシン) が増えつつあるのも、この部屋の特徴です。また、シールドルームも健在です。



317 号室 (左)

主に材料・木材関係の人間が集まっています。机の配置を一昨年状態に戻し、若干広くなったように感じられる。この部屋から乾熱滅菌器がなくなって「夏は快適！」と思ったのも束の間、梅雨の時期のジメジメした暑さでもう限界でした。

404 号室 (材料関係の部屋) と 307 号室 (ゼミ室) には大きな変動がなかったので、割愛させて頂きました。404 号室は相変わらず、夏はサウナ状態です。(知る人ぞ知る、ですね！) ゼミ室は新しい本棚の導入により、今までの乱雑さが全くの嘘のようです。(あくまでも一時的なことだと思いますが…)

ちょっとここで閑話休題、題して「副編集長の独り言」

前略 梅雨もあけ、涼しげな気配もつかの間、夕方の竿灯囃子の音色、団扇の羽音が聞こえる、暑い暑い夏となりました。今年の就職状況は例年の様に厳しく昨年の就職氷河期も、ここ秋田ではまだまだ続いております。

研究室の面々は、巷で言われる就職状況の緩和も実感できず、働き口の獲得の困難さを日々日々実感しております。

さて、当研究室の近況として、我が村のニューカム-をご紹介させていただきます。

まずは北大で生体研究をしておられた水戸部助手からお先に…、先生は佐藤技官の部屋、317 号室におわしませて。小一時間置きにゼミ室に現れ、マイルドセブンをふかされます。その煙は在住の喫煙者にとってなんと心地よい香りでしょうか、仙人さまとでも呼ばせていただきたいものです。笑顔がすてきな落ちついた方で、話を聞かれるのが上手な肩の凝らない先生であります。研究に関しては著者本人、語るのもおこがましく、ここでは控えさせてもらいます…

それでは次に周さんにご登場していただきます。周さんは昨年度から研究室に遥々、唐の国からいらしゃいまして、現在、積層チップコンデンサの内部破壊について研究しており、著者と同様、実験は 404 号室にて執り行っております。

来秋当初は、筆談にて著者本人に漢語のいろはを享受してもらい、感謝しております。なかなか気さくな方でありまして、404 号室での実験の際、著者の吹き鳴らす口笛にセッションしてくれるなど、まだまだなにかをお隠しになってられる様子、今後ともお出しになる一挙手、一動作から醸し出されるハーモニー、著者本人、楽しみにしております。

それでは副編集長の独り言これにて失礼。

草々

P.S. この文面はフィクションであり、著者本人は全く責任を負いません。

留学生紹介

昨年の 10 月、わが吉村研究室に研究生として周 遠翔さんが来られました。周さんは今年の 4 月から、博士後期課程に入学し研究を行っております。

その周さんに「自己紹介」として寄稿していただきましたので、掲載します。

Best with to you

Lucky stars always shine above you

I'm ZHOU Yuanxiang, from Beijing. I'm born in Putian, Fujian Province, a beautiful city by the sea in the south of China. Last year, I came to Akita to begin my further study directed by professor N. Yoshimura in Akita Univ.. After more than half year of study, I find that in the sunny days, it's very beautiful and warm just like my home town, and the Japanese people are friendly and enthusiastic. In Yoshimura laboratory, the teachers are scholarly, the students are diligent. Everyone help by each other. Though it's somewhat difficult for me to communicate others in Japanese, I like here very much.

In 1983, Through a competition entrance examination, I was admitted to a comprehensive university Tsinghua University with the top marks of our high school. Majored in High-Voltage Engineering and Its Information Procossion, in the Department of Electrical engineering. During my under-graduated study, I worked at the investigation on AC & DC contaminant discharge properties. At the same, I carried out with the research of silicone polymer under the guide of the professor who is the patentee of the production of silicone rubber polymer in China.

After five years of hard study, I received my B.E. degree in 1988. In the same year, I became a post-graduated student, major in on-line monitoring of electrical equipment in Electric Power Research Institute of China (EPRI, China).

In 1991, after got my M.E. degree, I served in EPRI to continue my research work on electrical equipment. I had been exposed to many problems in my practice and had obtained experience which enable me to have a deep understanding of the physical and chemical properties of electrical equipment.

After several years of practice, I feel that it's necessary for me to expand my acknowledge. I knew about professor Yoshimura from lots of his papers published in IEEE before I came to Japan. I was struck by his research field, and hoped to study under his guide. I would show my thanks to professor Yoshimura for giving me such a good chance to study in Japan, and feel honor to continue my favorite research work under his umbrella. I believe that I will learn a lot from professor. And there is no doubt that the knowledge and the experience got from him will help me to do more contribution to my motherland.



年間行事

あんなこと、こんなこと、思い出すと昨年も本当にいろいろなことがありました。それでは、昨年8月からの行事を超特急で振り返ってみましょう。

1995.8月

竿灯の時期がやってきた。年々暑さの質が悪くなっているような気がする。そんな中、焼き肉パーティが行われた。どういうわけか途中から雨が降り出す。せつない... 中旬には4年生の中間発表が行われ夏休みへ突入。ゆっくりと夏が過ぎ去ろうとしていた。

1995.9月

就職組、大学院進学組ともにほぼひと段落の日々。ため息の数もめっきり減る。それも束の間、研究の足音がゆっくりとしかし力強く聞こえ始める。

1995.10月

吉村先生が10月13日に発表された秋田市文化章を受章。(受章式は11月)また、周遠翔さんが我が研究室の研究生となる。

1995.11月

吉村研・谷口研・坂田研対抗吉村杯争奪ボウリング大会が開催される。何がそうさせるのか1位2位を我が研究室が奪取。おかげで2次会は鈴木先生を筆頭に大変なこととなる。

1995.12月(上旬)

加竹大会開催。写真には撮られたくないなんとも恥ずかしい格好...むしろそれが心地よかったりする。そんななかで自分の持ち歌をこみっと(じゃない人もいる)歌う。吉村先生ありがとうございました。

1995.12月(下旬)

この頃から住民の目つきが良くなってくる。顔色もある意味でいい。いつしか院生までもがドラッグ状態に陥る。冬期ゼミは約一名を除き終了。そのまま忘年会へと突入。今までの疲れから1次会ですでにやばい状態の人間がいるなか、2次会は吉村先生宅で行われた。腹芸を披露するもの、帰り際リコンを持って帰ろうとするものなどいて、吉村先生と奥様に大変

ご迷惑をかけました。

1996.1月

恐ろしいほどの寒波。アパートの水道が止まる。修論・卒論は山場をむかえる。パソコン使用上、1部、2部さらに3部の住民が現れ始める。みんな掃除をしようね!

1996.2月

やっと修論・卒論が終わる。頑張った。安らかに眠るが良い。お疲れさまでした、乾杯!気持ち悪いっす....この1年間もしくは2年間で学んだものって?

1996.3月

修了・卒業式。みんなとの別れが近づいている。先輩後輩を抜きにして人との別れは辛いものだ。でも4月からの新たな出会いに爆走しましょう。

1996.4月

助手として水戸部一孝先生が配属されるとともに新たな刺客(4年生)が送り込まれてきた。歓迎パーティでは4年生よりも院生がフィーバーしてしまい、やっぱり鈴木先生も加わるなどして大変なこととなった。(またか....)

1996.6月

交通死亡事故発生。研究室の空気が重い。死について考えさせられる。

1996.7月

今年の就職は求人こそ多いが内定をとれない。自分の研究も滞っている。腐らずにがんばれ!

研究紹介

現在、博士後期課程 6 名、前期課程 9 名、学部生 12 名の学生がいます。水戸部先生の加入により、さらにリッチでバリエーションに富んだ研究テーマとなっております。

高分子結晶とトリイング劣化に関する研究 (D3)

本研究では、結晶性高分子ポリプロピレンやポリエチレンなどを用い、トリイング劣化に及ぼす球晶、ラメラ、結晶子サイズ及び結晶化度の影響を明らかにすることを目的とする研究を行っている。

酸性雨が有機絶縁材料の耐トラッキング性に与える影響 (D3)

有機絶縁材料が酸性雨によって受ける劣化作用を物理的および化学的な点から検討し、耐トラッキング性との関連について検討する。

The Influence of Crystalline Morphology on the Formation of Water Trees in Polymers (D3)

A water needle is respectively inserted into spherulite region and amorphous region (boundary between spherulites) to observe pattern and growth of water trees by image processing technique, and further to investigate whether the branches of a water tree pass through or reroute around spherulites.

複合絶縁材料中の電気トリ進展に及ぼす界面及び電界方向の影響 (D2)

ケーブルの中間接続部における EX と EPR 間の接触面は斜面である。電極と界面間の角度により絶縁システムの耐トリイング性が異なると考えられる。ここで、上記のような界面を人工的に作製し、トリ進展に及ぼす界面及び電界方向の影響について基礎的な研究を行う。

絶縁材料の結晶性及びその空間電荷問題 (D1)

電気絶縁材料の結晶性及びその空間電荷分布について調べ、空間電荷が絶縁材料の電気伝導と絶縁破壊への影響を考慮し、絶縁材料の絶縁破壊メカニズムを解明する。

Researches on the optimum lighting by MC (D1)

The Monte Carlo (MC) method is a well known technique based on statistical sampling that has the desired characteristics. My research task is simulating the lighting effect in the printed circuit inspection by MC. It involves the usual stochastic sampling of lighting fields, the data processing and so on.

天然ゼライトを用いた電気二重層コンデンサの作製と電気的特性 (M2)

電気二重層コンデンサは活性炭を電極に使用しております。一般に使用される活性炭は極性分子の吸着を行いにくく、電解質水溶液の含浸を妨げます。これを極性分子吸着剤であるゼライトにて改良し、含浸効率を高め、本コンデンサを高容量化する研究です。

屋外用高分子絶縁材料の表面劣化現象 (M2)

高分子絶縁材料表面は紫外線、酸性雨、オゾンなどの外的劣化因子の下に長期に渡ってさらされ、材料の耐汚損特性（撥水性、耐トラッキング性）が低下する場合があります。本研究はこの耐汚損特性の低下メカニズムの解明を目的としている。

誘電体パリア放電によるエキシマランプの基礎研究 (M2)

紫外線は高い光子エネルギーを持っていることで有名なので、殺菌など様々な光源として利用されています。本研究では、波長選択のしやすいエキシマランプについての研究を行っております。高電圧だし、紫外線だし、オゾンは発生するし（真空紫外光なので酸素を吸収してオゾンを作ってしまうのです。）危険だらけです。

限流素子材料に関する基礎研究(M2)

立ち上げから一年が経った。様々な人々のおかげでなんとか修了できそうな気配だけはする。ほんとに気配だけかもしれない。さて、この先は？ 本研究では、配電系統で生じる短絡事故時の大電流を抑制する素子の開発を目的としている。

ゾルゲル法による安定化ゾルニア膜の作製とその電気的特性(M2)

昨年度までの当研究室においての実験で認められているゾルへの金属ゾルの添加による影響を検討、考察する。本研究では Yttria ゼル調製法を導入し、より安定化したゾルを作製することを試みる。ゾルゲル法にて Yttria ゼル調製法による安定化したゾルを利用し、YSZ(Yttria-Stabilized-Zirconia)セラミック厚膜を作製し、作製した膜の電気的特性に対して Yttria ゼルによる影響に検討を加えることを目的とする。

ゾルゲル法によるITO薄膜の作製とその特性(M2)

液晶 CRT 上の透明電極として、主に用いられている ITO(Indium Tin Oxide)透明導電膜をゾルゲル法により作製し、その特性についての研究を行っています。現在、より低温での製膜を目指し、日々、ゾルとの格闘を行っております。

ヒトの知覚運動協応に関する工学的研究(M1)

高齢化社会になると共に、痴呆患者の増加が予想される（ことに秋田県においては深刻）。脳機能の衰えを「注意」に着目して、視覚刺激・聴覚刺激による知覚運動協応で「注意」を定量的に判断し、痴呆の初期段階での発見を目的とする。

屋内配電線における電気火災発生過程の解明(M1)

この研究の目的は、近年大都市で数多く発生し問題になっている塩化ビニルコードからの出火について解明することです。その原因として、開閉サージ、誘導雷サージ電圧の低圧配電線への進入が考えられているので、この電圧印加による材料の劣化を証明することが主な内容です。

液晶ディスプレイ(LCD)のバックライト照明シミュレーション(M1)

master 唯一のシミュレーション。最近進歩の著しい LCD で、自ら発行しない液晶の光源としてバックライトがよく使われている。このバックライトは LCD の消費電力の約 70% を占める。そこで、このバックライトからの光をいかに効率よくするか、照明工学の面から MCS (モンテカルロシミュレーション) を用いて解析している。

学生代表挨拶

学生代表 熊谷 誠司

全国各地でご活躍なされております当研究室の諸先輩方、関係者の方々、この夏をいかがお過ごしでしょうか。鬱陶しい梅雨も過ぎ去り、やっと夏らしい天気は秋田では続いております。研究より強敵である暑さとの格闘もすっかり夏の風物詩となった観があります。

話は変わりますが、4月に助手として水戸部一孝先生が当研究室に赴任なされました。水戸部先生は北大で生体工学を研究なされていた関係で、この分野を新しい研究テーマとしてご指導なさっております。また、バイオ関連の研究の面倒も見て頂いております。年齢も学生と近いせいか、研究以外の学生の面倒も大変良く見て頂いており、日頃からお世話になってばかりであります。

当研究室の研究分野は、水戸部先生が加わりったことにより一層多岐、多様化しております。そのため、分野の異なる者同士で刺激し合い、相互の理解が深まる良い方向に進んでおります。日々、先輩方のご期待に答えられるよう研究室一丸となって精力的に研究を行っております。

新聞「挑戦」は本年度で第6号を数え、猛暑の中での編集作業は年中行事の一つとしてしっかり定着しました。その中、本年度も新聞「挑戦」を皆様のお手元にお届けすることができまして、大変嬉しく思います。年に一度ではありますが、諸先輩の方々からご意見を頂ける貴重な場と考えております。ご意見、ご要望がありましたら是非ともご連絡の程よろしくお願い致します。

学生代表として至らぬ所ばかりで、ご迷惑ばかりお掛けしているにもかかわらず、素晴らしい研究環境を提供して下さる吉村先生に感謝致しますと共に、先輩方が培われた伝統を守りつつ、より一層研究室を発展させるべく努力してゆく所存であります。

吉村研究室新聞委員会

顧問	水戸部一孝
編集委員長	杉本 智子(M2)
副委員長	木田 正彦(M2) 薄田 一(M2)
	秋山 勉(M1) 永井 記幸(M1)
編集委員	木内 了(e4) 鈴木 元康(e4)
	古田 好範(e4)

§ 事故報告及び追悼 §

去る6月5日、研究室学生の何人かで出戸浜に行った際、その内、4年生3人の乗った車が北への出し過ぎで事故を起こし、後部座席に座っていた長屋信明君が即死、他2名は入院療養中です。この事故により研究室全員がそれぞれ、事故のことだけでなく様々なことを考え、反省したと思います。同じ過ちを二度と起こさないことを誓っています。

7月23日で49日が経ちました。長屋君の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

諸先輩方も車の運転には、十分に注意して下さい。

編集後記

暑中お見舞い申し上げます。皆様、いかがお過ごしでしょうか。秋田の夏の風物詩「竿灯」まで10日余りと迫り、大学の構内も竿灯の練習でかなり賑やかです。笛や太鼓の音色を聞いていると、私も祭りに参加したくなります。(実は秋田に20年以上住んでいて、まだ1度も竿灯を見たことがありません。)

ところで、今年の「挑戦」いかがでしたでしょうか。今年の新聞編集委員は非常に意欲的で、いまいちな原稿に対して訂正を言い渡す私のことを「鬼デスク」とか言いながらも、文句一つ言わずに(!?)協力してくれ、編集委員長としては感謝する次第です。私としては、この新聞により皆様が吉村研の人々の状況を知ってくれば幸いです。

刈刈ッのお陰で毎日寝不足。陸上が始まるとさらに寝る暇がありません……。頑張り、日本！ 最後になりましたが、OB・OGの方々からのご意見、ご感想を心よりお待ちしております。連絡先は下記の通りです。(今年から顧問は水戸部先生です。)

それでは、お体に気を付けて下さい。秋田にお越しの際は、是非とも研究室にお立ち寄り下さい。

〒010

秋田県秋田市手形学園町1-1

秋田大学鉱山学部電気電子工学科

電気システム工学講座 吉村研究室

水戸部 一孝